

特別研究員研究発表要旨

眞宗の實踐的課題

— 信仰における倫理を問う —

秦 治 人

浄土教の宗教的實踐の根拠にあるものは「弥陀の本願には老少善惡のひとをえらばれず。ただ信心を要とすとすべし」という倫理を超えたものの信念である。そしてその信念が具体的生活實踐として表現されるとき、絶えず自己反省の指標となるものは、「善惡のふたつ総じてもって存知せざるなり」「ただ念仏のみぞまことにておわします」という如来のまことである。一切の倫理的価値を突破してくるものにおいて自己が無化されつつ、同時に自己としての自立は、このような倫理を超えた宗教的立場においてのみ可能である。信仰と倫理の交渉の仕方は、倫理に死し信仰に甦るといふかたちである。

先ず考えられねばならないことは、宗教的實踐の立場は倫理以前とは無論、倫理の立場とも直結するものではないということである。即ち、倫理は倫理自身の中で破綻し自己矛盾と化すところで宗教と交渉し、宗教的自覚の世界へと道を譲る。罪惡の意識の切迫によって、倫理的主体が自己を保持し得なくなり、その破綻の自己を破って現われてくる世界が宗教の地平である。

浄土教信仰の立場はこのような自力無効の自覚を離れては、罪惡の意識が絶望的自己として捉えられるとき、逆にそのような自己を存在の全体において甦らせるものが如来の本願他力といわれるものである。

以上は倫理的主体から信仰の主体への方向を開くものとしての倫理の立場を考えたが、ところでこのような倫理を超えた信仰の立場が宗教的實踐においてあらわす倫理の側面は如何なるものであろうか。この問題は、從來真俗二諦が浄土教的独自の展開において語られてきたものや「掟」と言われてきたものの精神を真諦・他力信心の自覚内容と相応させて論究する必要がある。そのことはここでは省略するが、しかし眞宗の俗諦義はあくまでも真俗二諦という出世間法の中で出てくるものであって、俗諦を真諦と切り離してそのまま世間法と置きかえてはならないということである。即ち俗諦や掟と言われるものを世間の人倫の規範や世間道徳に解消させてはならない。真俗二諦は眞宗の自覚とその實踐の批判原理としてダイナミックに呼応し、世間の人倫道徳、外教邪偽の異執を批判し絶えず内に破るところの根本精神である。

俗諦といってもそれは倫理ではなく、倫理を超えた眞実信心の自己批判の内容と言うべきものである。眞宗の宗教的實踐が現実を踏み台として自己をきたえていく場が俗諦である。

それについて清沢満之は次の如く述べている。「眞宗の俗諦の目的は如何なる点にあるか。其の實行の出来難い事を感知せしむるのが目的である。此は真諦の信心を得たる者に対すると、未だ信心を得ざる者に対すとの別はあれども、何れの場合にても、道徳的實行の出来難いことを、感知せしむる点に於いては同一である。其の如何なる妙趣があるか云はば、未だ信心を得ざる者は、

道德的実行の出来難きを感じするよりして宗教に入り、信心を得る道に進む様になる」(『宗教的道德(俗諦)と普通道德との交渉』全集六一—二一九)。

ここに俗諦は未信の者には倫理を通して倫理に破れ宗教に入り、已信の行者には俗諦を勧めて罪惡の感知を促し、転じて他力の信仰を喜び、いよいよ無限大悲に対する感謝の念を深めさすものであると教えられる。従ってまた「真宗俗諦の教は、其の実行が出来ると云ふ方が主眼ではなくて、其の実行の出来ざることを感知せしむるが主要であるから、——中略——故に俗諦の教は、つまり真諦の信心を裏面より感知せしむるより外はないのである。即ち真諦の積極的に対して俗諦は消極的に趣味を有することである。故に此の俗諦の教を以て積極的に人道を守らしむるものであるとか、国家社会を益するものであるとか云ふ様に思ふは大なる見当違ひである」(同上)と述べられる。

人間が倫理的であれ宗教的であれ、その実践が主体的であれば必ず罪惡感に逢着せざるを得ないが、宗教的主体へと転じた時、罪惡もまた他力の信心をかえって積極的に喜ばしめ、それを裏打ちするものとなる。俗諦の倫理と言うも従って単なる世間的掟や人倫の強制に墮落するならば、もはや真俗二諦で表現される真宗精神を誤解することとなる。

倫理は主体性に基くものであるとき、罪惡を感じせしめて我々を破綻へと追い込むが、その破綻をして自己が宗教によって甦るところに倫理の任務があり、又倫理の完成もある。倫理は宗教に破られるところに倫理の完成、倫理の意義がある。

かくして宗教的主体となって自覚の信心に支えられるとき、罪惡は自己存在の領域を超えて人間そのものに根を張った、個にし

て類、一人にして群生というような存在性そのものの罪惡として自覚される。そのような罪惡の自覚は「宿業」と言われているものであるが、それは他力信心の自覚の中で与えられたもので単なる個人的悲しみではなくむしろ如来の悲傷として与えられた自覚内容である。ここに群生として一つの宿業の大地に生命を同じくするという宗教的主体の重さは、そのまま、人間共同体に於ける關係の厳しさとして領かれてくるのである。

年ごろ念仏して往生願ふしるしには、もと悪しかりしわが心をも思ひかへして友同朋にも懇に心のおはしましあはばこそ世を厭ふしるしにても候はぬ(『末燈鈔』第一九通)

とあるように念仏者の人間關係は、どこまでも「友同朋にも懇に」心を開いていく、それは罪惡を否定することなく懇なる同朋と共に悲しむことである。それがなければ「世を厭うしるし」のない放逸無慚の煩惱に狂はされた生活という他ないからである。それ故に、「この世の悪きをも棄て、あさましき事をも為ざらんこそ世を厭ひ念仏申すことには候。としごろ念仏する人なんどの、人の為に悪しきことをし、また言ひもせば、世を厭ふしるしもなし」(同第十六通)と言われるのである。

この信仰生活の厳しい自律精神は単なる人倫道德と質を異にする。倫理の厳しさも自律的厳しさであるが、あくまでも自己が自己に対するところの厳しさを超えない。しかし念仏生活、宗教的実践の厳しさは宿業の生に生きる者の悲しきを見失ってはならないところにある。それは個人化することが許されない信仰の公性というところである。そのことが、「善知識をおろかに思ひ師をそしる者ば謗法の者と申すなり、親をそしる者ば五逆の者と申すなり」(同第十九通)と示されるのである。